

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

寒そうな空です赤い服を撰る

刈谷 志津選

島村かりん

〔評〕 今日から12月。年も押し詰まった最後の月で「師走」とも言い、師が忙しく走り回る月でもあるともされている。また寒い北風が吹き冬本番となる。揚句上五「寒そうな空」は、太陽の見えないどんよりと曇った空で、雨が降りそうでも降りもしない、何とも言えない底冷えのする寒さが伝わってくる今日の空模様。街中のある洋装店に立ち寄り、赤い太陽の欲しい今日、寒さ対策として温もりを感じさせる赤色の服を選んだ。穏やかな口語体で、寒い空と赤い服と言う女性感覚の素敵な取り合わせに、若さと心の温かさにも触れる一句。

平成の最後となりし除夜の鐘

大川 節弥

〔評〕 平成の元号は、来年の4月までで、5月からは新元号に改められる。平成の世での除夜の鐘は今年が最後となる。その「除夜の鐘」は周知のように、大晦日の夜12時から各寺院で、百八の鐘を撞きはじめる。一つずつ余韻の静まるのを待つため、約一時間かかる。これは百八の煩悩を消滅するためと言われ、近年は各地で有名な寺々の除夜の鐘を、NHKがテレビで放送するのが例となった。賑わいの紅白歌合戦を見終えて始まる除夜の鐘の音に、行く年来る年の思いを深くする。元号が変わる来年は、「災害」や「猛暑」の無い平和な年でありませうように。

野鳥きて赤い木の実のなくなりぬ

片岡 豊子

〔評〕 「野鳥」とは、野にいる鳥の総称で、この句の季語は「木の実」秋である。秋も深まり四囲の山々にも鳥達の食べ物も少なくなり、民家の方へも下りてくる。作者の庭には赤い実のなる大きな木があり、今年もたわわに実った真っ赤な実の、つやつやとした光沢が日に映えて美しい。鳥達は見逃さない。色と味を知っているのか、一羽、二羽、三羽、次々と数を増やし、またたく間に、きれいさっぱり無くなってしまった。もう少し見ていたかった思いも空しく、何れは落ちる木の実をさっと消した野鳥。これも自然の摂理かも。この世に生きるものの共存を思う。

入選

をとこ一人忽をいためている日暮
玄関に狸の郡れる山の宿
時雨るるや夢の中には黄泉の人
案山子揚げ田の休息や青い空
風はこぶ林の中へ散り紅葉
今日といふ一日の暮れて十三夜
獣の道銀杏落葉に消されけり

二句抄

忘却は都合よき事木の葉髪
忘れぬあの日落暉石路の花
成就せぬままの初恋秋の蝶
月見ればはるかな友のこと思ふ
節くれの手を摩りつつ秋惜しむ
音もなく冬木と無なりし里の景
乾き切り一雨を待つ野菜畑
太鼓打ち鳴子打つ子の秋祭
銀杏散る石灯籠に先祖名
腕白も見直す笑顔七五三
冬ぬくしベストセラールを読んでおり
良き仲間無礼講達年忘れ
雨もよい星の入東風棹走る
火吹竹五衛門風呂の夕語り
鉄塔を鉄塔として冬に入る
日没がもっとも早き日の屋台
木の实降り止まずハイネの詩のように
菊を焚く煙りの中の毘沙門天
来年を約くし散りゆく木の葉かな
西風や今年も軒に吊し柿
幻想の冬の紙博和の世界
歳月は流水のごと今年行く

次題「当季雑詠」

締切/毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1

893-1922

東谷 晴男
岡村 嘉夫
津田 久美
津田 久美
渡邊ゆかり
森岡 照月
平野 洋子
川村 博子
川村 博子
片岡 豊子
岡村 嘉夫
森岡 照月
渡邊ゆかり
東谷 晴男
島村かりん
大川 節弥
刈谷 志津

有料広告

やまおか眼科

院長 山岡 昭宏

いの町新町20-1

TEL (088) 893-5161

■日帰り白内障手術

■OCT (光干渉断層計)

診療時間	月	火	水	木	金	土
午前 9:00~12:30	○	○	○	○ 13:00 まで	○	○
午後 2:00~5:30	○	手術	○	△	○	▲

▲第2、4土曜日 午後1:30~4:00

▲第1、3、5土曜日 午後休診

休診/木曜午後 日曜祝日